

大きなピンチを チャンスに変え 整備から他分野へ 事業拡大を

工場ルポ Factory Report

小原自動車工業 (静岡県沼津市)

静岡県東部にある、JR東海のターミナル駅のひとつである沼津駅からほど近い、国道1号沿いを本社とする小原自動車工業(小原嘉弘社長)。同社で最も歴史が長い大型車整備の傍ら、近年は一般カーオーナーを対象とした乗用車の整備、さらには钣金塗装にまで取り扱い範囲を広げ、事業規模を拡大している。



小原嘉弘社長(後列左端)と弊社スタッフ

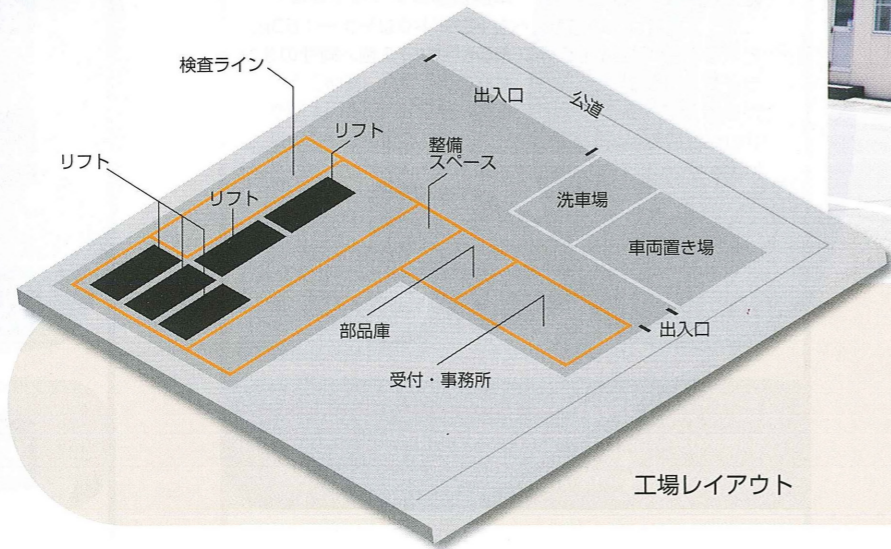


小原自動車工業

- ◆代表: 小原嘉弘
- ◆創業: 1923年
- ◆指定整備工場認可: 1963年
- ◆所在地: 静岡県沼津市真砂町8-1
- ◆TEL: 055-962-0208

[プロフィール]

赤と黄色を基調にしたコバックの看板が目立つ本社事務所。隣接する屋内工場は約600㎡の広大なスペースの中に、検査ラインやリフトなど整備機器を整然と配置し、安全かつ効率よく作業できる環境を整えている。



工場レイアウト



①明るい雰囲気の本社受付。デントリペアやヘッドライトクリーニングの施工前後を実物で紹介するなど単価アップの仕掛けも②大型車の整備は第二工場が担当。大型車対応の検査ラインも備える③第二工場の钣金塗装スペースにはデントリペアのツールがズラリ

同社の創業は1923年(大正12年)。現社長・嘉弘氏の祖父にあたる初代社長・小原幸太郎氏が、東京都心にある有楽町駅近くのガード下で、個人経営の整備工場を開業したのが第一歩だった。しかし同年9月1日、関東大震災が発生し、工場は壊滅的な被害を受ける。それでも同年11月には沼津の地で、大震災から約2カ月という極めて短い期間で再興を果たしている。その7年後には現在の本社へ拠点を移し、太平洋戦争の渦中にある44年(昭和19年)10月には法人登記。困難な時代の中で旺盛なチャレンジ精神を発揮し、同社の地盤を着実に固めていった。

戦後は大型トラック・バスの整備と販売を中心に工場を運営している。東京オリンピックが開催された64年(昭和39年)の8月、同県駿東郡長泉町に第二工場を建設。日本のモーターゼーションとともに発展していった。しかし90年代には、大型車ディーラーの整備内製化やバブル経済の崩壊などで、入庫台数が減少傾向へ転じる。

95年に実施された車検・点検などに関する大幅な規制緩和の影響を受け、整備業界全体が激変の渦中にあつた97年。一般カーオーナーが対象となる乗用車の整備に進出する術を模索していたところ、近隣の整備工場から誘いを受ける。それをきっかけに、車検チェーンの先駆けである「車検のコバック」に加盟した。

だが、こうした新規事業へのシフトには、少なからず痛みも伴っている。大型トラック・バスの整備では、

カーオーナーは大半が法人で、入庫も納車引取がメインのため、接客の機会は少ない。しかし来店入庫を基本とする車検チェーンでは、一般のカーオーナーに直接、車両の状況や整備・部品交換の必要性などを説明しなければならぬ。つまり必然的に、フロントやメカニックにもレベルの高い接客マナーが要求される。

加わり、「ハイブリッドカーの保有台数に対し明らかに入庫台数が少ない」(小原社長)ことに、強い危機意識を募らせている。

そのため日整連の「コンピュータシステム診断認定店」、コバックの「ハイブリッド認定店」となるのには言うに及ばず、静岡県内のコバック加盟店と共同で「ハイブリッド・プロ」資格を創設。ハイブリッドカーの整備に対応できる技術力を持つことを、看板やチラシなどで強くアピールしている。

そのため当時、ベテランのメカニックを中心に数名が退職したが、その後入社した若手スタッフを、車検チェーンや損害保険会社が実施する研修会などを活用しながら短期間で戦力化。乗用車の整備事業を軌道に乗せ、99年には第二工場もコバック加盟店とした。その結果、今では年間の車検入庫台数が本社で約3千台、第二工場で2千台前後に達し、年間売上とともに約6割を乗用車が占める事業構成となっている。

さらに2005年からは第二工場でも、人数・設備とも小規模ながら钣金塗装の内製化を開始。昨年にはデントリペアの技術も習得して、軽補修から大破車両の骨格修正まで幅広く対応できる体制を整えた。

このように同社が、創業間もない頃から大きなピンチを大きなチャンスに変え、成長につなげていったのは、交通量の多い国道1号沿いで近隣にディーラーが密集するという、極めて競争の激しい経営環境下にあることも無関係ではないだろう。

近年はメンテナンスパックの拡販にハイブリッドカーの急速な普及も